

重度認知症に対して開口抵抗訓練が有効であった1例

間接嚥下訓練は基礎的訓練で食物を使用せず安全に実施することが出来る。一方で、認知機能の低下などにより教示の理解や協力が得られない患者には実施出来ない問題がある。今回、重度認知症症例に開口抵抗訓練を用いて舌骨上筋群の筋力強化を図り嚥下機能に改善を認めたので報告する。

症例

70代男性、体重39kg、HDS-R 2/30点

既往歴：大腸癌、腎不全、間質性肺炎

現病歴：食思の低下から入院し加療中に脳出血を発症された。発症後の経口摂取で誤嚥性肺炎を発症し経管栄養となり、リハビリ目的で当院へ転院となる。

経過

入院後、嚥下造影検査(以下:VF)を実施した。結果、Penetration-Aspiration Scale(PAS)においてPAS 5であった。そこで、舌骨上筋群の筋力低下に対し開口抵抗訓練を5週間実施し再評価を行った。結果、PAS 5から1に改善を認めた。また、超音波画像診断装置を用いたオトガイ舌骨筋矢状断面の断面積においても初回VF時 $129.0\pm 16.1\text{mm}^2$ から $174.4\pm 13.9\text{mm}^2$ と改善を認めた。

考察

今回、重度認知症症例に対し開口抵抗訓練を用いて舌骨上筋群の筋力強化を行った。その結果、PASおよびオトガイ舌骨筋の断面積において改善を認め3食経口摂取が可能となった。認知機能の低下は、訓練教示の理解や協力の阻害原因となり実施出来ないことがある。しかし、開口抵抗訓練は教示内容がシンプルであり、認知症症例でも動作協力を引き出すことに有効である可能性がある。